

よく見る草花



雑草として至る処に生え、秋には燃えるような黄色の花を枝先いっぱいにつけ、よく人目に触れる花、セイタカアワダチソウは、今では日本の花のように思われがちですが、実は 100 年以上も前に来たアメリカから渡来した国外外来種なのです。昭和 20 年以前にはさほど目につく花ではなかったようですが、戦後の混乱期を過ぎた頃から急激に分布域を拡大し、現在では全国的な雑草となっています。この花が猛烈な勢いで各地に広がって行ったのはいったい何故なのでしょう？専門家は次のように指摘しています。

- 1) 一株で莫大な種子を生産すると共に、種子が風に舞い遠くまで飛散する
- 2) 地下茎が横走り、旺盛な繁殖をすると共に、根から生育阻害物質を出して他の植物を受け入れない（他感作用）
- 3) 日本の風土が生育に適している
- 4) 蜜源植物として養蜂家に好まれ、各地を巡回するたびに種子を散布された

河原や草地で群生するセイタカアワダチソウが一斉に開花した光景は、黄色の絨毯を敷き詰めたようで、とても美しいものです。以前は飛び散る花粉が花粉症を引き起こすとして嫌われていましたが、最近、花粉症とは無縁な花であることが分ってきたようです。しかし、アレルギー体質で、花粉に敏感な人は注意した方が良さそうです。

セイタカアワダチソウのように各地で大繁茂し、日本の生態系を狂わすような外来種は、嫌われ者になっています。このような外来種は数多くありますが、皆さん必ず一度は目にしたことのある、ほんの身近に生育するものを拾ってみても、アメリカセンダングサ、コセンダングサ、ヒメジョオン、ハルジオン、オオアレチノギク、アレチヌスビトハギ、イヌムギ、ネズミムギ、シマスズメノヒエ、ナガミヒナゲシ、マツバウンラン、オッタチカタバミ、ムラサキカタバミ、アメリカフウロ、シロツメクサ、チチコグサモドキ、ブタクサ、カモガヤ、ナガハグサ、シナダレスズメガヤなど数限りがありません。

日本が長い鎖国時代を解き、欧米との交流を始めると、外国から持ち込まれる植物が次第に増え、従来植物（在来種）に混じって各地で生育するようになりました。初めは外国船の寄港する港の周辺で細々と生育していましたが、日本の風土に適した植物は次第にその生育場所を広げ、繁殖力の旺盛な植物は急激に分布域を拡大すると共に、在来植物を駆逐するようになりました。このような植物がセイタカアワダチソウやヒメジョオンなど前述した国外外来種です。

今回は国外外来種のなかで都市近郊に見られる特徴的なものを取り上げてみました。

① アメリカセンダングサ（キク科、センダングサ属）

道端、堤防、荒地、休耕田など様々なところに生育する北アメリカ原産の一年草。茎はよく分岐して 50～150 cm になる。葉は 3～5（7）枚の小葉でできた複葉で対生する。小葉は先が細く尖り、三角形の鋸歯があり、無毛。頭状花は葉状の総苞に囲まれ、周辺に少数の舌状花が、中央部に筒状花が密生し、共に黄色。果実には 2 本の刺があり、衣服や動物に付着して散布される。土壌の種類、乾湿、肥沃度などに対して適応性が高いほか、種子の寿命が 16 年にも及ぶことがあることから雑草化し、現在は、沖縄から北海道まで分布している。よく似た植物にコセンダングサがあり

ます。こちらは種子に3本の刺があり、種子の幅が狭いのが特徴です。



② アレチヌスビトハギ (マメ科、ヌスビトハギ属)

道端、荒れ地、講演の垣根、堤防など至る処に生える北アメリカ原産の一年草。機器は高さ50～100cmで開出した毛が多い。葉は3小葉からなり、小葉は長さ5～8cm、幅1～3cm、両面に毛がある。花は



9～10月、紅紫色、長さ1cm弱の蝶形花でハギの花に似る。果実は扁平で、3～6節に



くびれ、熟すと各節でちぎれる。果実の表面には細かい鉤毛が密生し、衣服や動物に付着して散布される。よく似た植物にヌスビトハギがあります。こちらは日本の在来種で、山野に生育します。果実は2節です。

③ ヒメジョオン (キク科、ヒメジョオン属)

道端、荒れ地、公園、畑、土手など至る処に生える北アメリカ原産の1～2年草。茎は直立し、上部で分岐し、高さ1mほどになる。根生葉は卵形、縁に粗い鋸歯と長い柄があり、全体に多毛。茎につく葉は広楕円形、先が尖り、互生、無柄、縁に低い鋸歯がある。花は春から秋にかけて開花、枝の先の径2cmほどの頭状花を多数つける。周囲の舌状花は白色、中央部の筒状花は黄色。筒状花にできるそう果(種子)には長い



冠毛があり、タンポポのように風に乗って遠くまで運ばれる。江戸時代末期に観賞用に導入されたものが逸出して全国に広がった。よく似た植物にハルジオオンがあります。こちらは3月下旬～咲き始め、淡いピンク色をしています。また、ヒメジョオンの茎は中実ですが、ハルジオンは中空ですのですぐに区別できます。

④ ノボロギク（キク科、キオン属）

道端、荒地、畑などに普通に見られるヨーロッパ原産の1年草。茎は高さ30cmほどで多数分岐する。葉は広線形で互生し、ふぞろいに羽裂し、柔らかい。葉の基部は耳状になって茎を抱く。花は多くは春から夏にかけて咲くが、1年中咲いている。茎の先に長さ



1cmほどの釣鐘形の頭状花をつける。

頭状花は全て黄色の筒状花。種子には白色の冠毛があり、風に乗って運ばれる。明治時代に帰化したといわれている。畑地の強害雑草で、駆除に困っている。他によく似た植物はありません。



⑤ ネズミムギ（イネ科、ドクムギ属）

道端、河川敷、堤防、土手、公園の植え込みなどに生えるヨーロッパ原産の1～2年草。茎は高さ40～70cm、葉は幅5～10mm、無毛、若いときには丸く巻く。春から夏にかけて茎の先に長さ30ほどの穂を出し、長さ2.5cm、10～20小花からなる扁平な穂をつける。普



通、護穎には1cmほどの芒があり、

穂軸はざらつく。飼料作物として世界中で栽培されると共に、ゴルフ場のラフや法面緑化にも使用されるため、これが逸出して各地で野生化している。よく似た植物にホソムギやドクムギがあります。これらとの雑種もあり、区別が難しい植物です。

